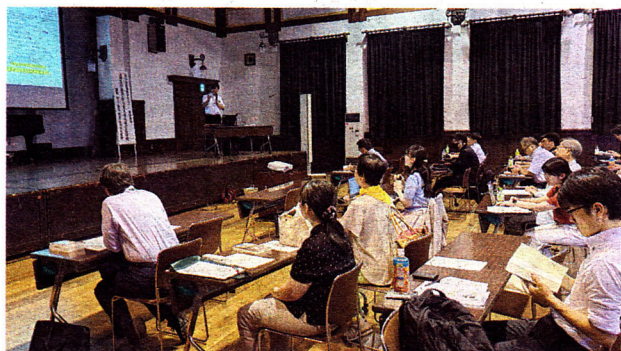


深志高自治あり方学ぶ

きょうまで 松本で教育セミナー

バンカラなど独自の文化を築いた旧制高等学校の系譜を学ぶ「夏期教育セミナー」が30日、松本市県3のあがたの森文化会館講堂で始まった。31日まで2日間の日程で、初日は一昨年に発行された『深志の自治―地方公立伝統校の危機と挑戦』（信濃毎日新聞社）の編著者2人が登壇し、旧制高校から影響を受けた松本深志高校（松本市）の自治について学んだ。

（田子元気）



井上さんの講演を聴講する参加者

帝京大学教授・井上義和さんは「『深志の自治』から考える未来の伝統校」と題して講演した。新入生の応援練習が他校でパワハラに当たると問題化したことや、校歌の歌詞が男子校時代のままで女子生徒の違和感が抑圧されてきた背景を示した上で、いかに伝統と向き合うかを説いた。

深志高で平成12（2000）年ごろに始まった生徒会の予算案について生徒会組織や部活動が徹底的に討論する「折衝会」が新しい伝統として根付いた背景を紹介し、「時代に合わなくなった伝統を廃止か墨守の対立の構図で捉えるのではなく、第3の道としてアップデート（更新）することが求められている」と結んだ。

旧制高等学校記念館、旧制高等学校記念館友の会が主催し、台風のため直前で中止した昨年の企画内容を再現した。信州大学教授・加藤善子さんによる伝統の相対化をテーマとした講演もあった。31日は午前9時半から3組の研究者による発表会を行う。